

私は社会科の授業が好きだ。特に昔の人がつくった様々なものの始まりを知ると、その背景や当時の人々について想像が広がり、とてもわくわくする。それは建築物であったり、今に活かされている社会の仕組みであったりするが、知るたびにそれらがうまく成り立っているということと、それを思いつき、広めた人々の知恵に感心する。

税金もその一つだ。一学期、私たちは学校で租税教室があり、税金の種類やどのようなところに使われているのかを学んだ。私たちの地域には温泉があるため、温泉に入る際にお客さんが百五十円を税金として支払うという、入湯税が身近な税金として挙げられる。現代だからこそ入湯税が日常的に浸透しているものの、最初に思いついた人は本当にすごいと思う。

租税教室と同じ頃、ニュースでは参議院選挙の演説の内容を報じていた。「所得税の見直し」「食料品の消費税をゼロに」「消費税の減税、段階的廃止を」。選挙の一つの争点となっていた税についての主張を見て、私は疑問に思った。なぜ大人は私たちに税の大切さを教えているのに、それを減らしたり、無くしたりすることを主張しているのだろうか。私たちの今を支えてくれている税金を、大きく変えてしまうのは問題ではないのだろうか。

そこで私は、どんな視点で税制が見直されることがあるのかを調べてみた。税制改正は、四月から秋ごろまで時間をかけて審議され、その視点は主に三つに分けられるそうだ。一つ目は政策的な理由で改正されるもの。二つ目は災害対応のために改正されるもの。そして三つ目が、時代に合わせて見直されるものである。私は、時代の変化によって税金も変えられているということに驚いた。考えてみれば、確かにそれは必要なことである。時代が変化すれば人々の生活も変化するのだから、そのしくみが変わらない方が問題だ。

私は今まで、税金を払わなければならないというきまりのなかで私たちは暮らしているのだと思っていた。しかしそうではなくて、税金が私たちに合わせて変化するということは、私たちはそのきまりとともに暮らしているのだということに気が付いた。

これからの時代、私たちが生きていく時代は予測不可能であるとよく耳にする。だからこそ、生活の変化が起きたときに、税金や他にも色々な社会のきまりを変えられるよう、一人一人が自分の声を届ける投票に行くことが大切だと思った。

今までもこれからも、ずっと私たちは社会のきまりとともに変化しながら生きていこう。私は納税者、そして三年後からは有権者として、私たちの未来を支えられるよう、納得のできる行動をしていきたい。